



# THE GRANPHONIC CONCERT 11th

グラントフォニック 第11回定期演奏会  
2012年11月3日(土)  
愛知県芸術劇場コンサートホール

ごあいさつ

本日は、お忙しい中、グランフォニック第11回定期演奏会に多数のご来場をいただき心よりお礼申し上げます。

昨年3月の東日本大震災と原発問題が世の中を大きな不安に陥れました。多くの方々が尊い命を失い、また住み慣れた地を離れての生活を余儀なくされておられます。改めまして、心よりお悔やみとお見舞い申し上げます。

そのような中、昨年5月の第10回定期演奏会での、自分たちの生き方を変えてみようと思いついた「太郎の愛」は、タイムリーな題材として皆さまのご記憶にも残っておられることと存じます。地球環境問題は永遠の課題として私たちが取り組んでゆくべきことと認識しております。

「感謝と挑戦」から1年半、今回は「青春」をテーマとして皆さまにお楽しみいただけるよう練習に励んでまいりました。

まずは、若き指揮者小嶋聰による男声合唱曲「草野心平の詩から」。次に、「チャイコフスキー・ロマンス」と題して、若き青年の愛と苦悩を朗読と舞踏を交えてお贈りします。

「草野心平の詩から」、「チャイコフスキー・ロマンス」は、本年5月にご逝去された畠中良輔先生が初演で指揮をされた作品です。畠中先生には第7回定期演奏会（2006年11月）に客演指揮をしていただいたというご縁もあり、先生を偲んで演奏いたします。

第3ステージは、團伊玖磨作品集から「ひぐらし」、「岬の墓」ほかを、向川原慎一の指揮で歌いあげます。いずれの曲も向川原自身の編曲によるものです。

最後は、今回のテーマそのものを表題にした「エリーの青春」。1960～70年代にかけて一世を風靡した青春の歌の数々を、指揮者成田正人がアレンジし、甘酸っぱい物語に書き下ろした作品です。

グランフォニックのメンバーも歳を重ね、平均年齢は60歳を超えてまいりました。団員60名の心には、「今まさに青春」という強い思いがあります。歌に、音楽に取り組む姿勢は青春時代と同じく真剣そのもの。本日は、会場の皆さんにもご自身の「青春」をお楽しみいただき、オンライン合唱団を目指すグランフォニックの新しい一面をお聴きください。

今回も、前回に統いて総合演出を堀口文成先生にお願いいたしました。ご経験豊富な、お客様目線でのご指導で、更に新しいグランフォニックスタイルを築きあげていただいております。

いよいよ演奏会の開幕です。最後までお楽しみください。

グランフォニック団長 細江太喜雄

# opening グランファーレ序曲

原詩：F. v. Schober

作曲：なりた まさと

指揮：成田 正人

ピアノ：早瀬 洋子

エリー・アンサンブル

開幕はこの曲から。2000年11月に団歌として作られた『グランファーレ～新しい風』をベースに、Schoberの「An die Musik（音楽に寄せて）」の詩を借りて、2010年に書き下ろしたものです。その詩の通り、芸術に、音楽に、そしてご来場の皆々様に、心からの感謝を込めて演奏します。

今回は、第4ステージのために特別に結成された《エリー・アンサンブル》の伴奏でお届けします。

Stage 1

## 男声合唱組曲 「草野心平の詩から」

I. 石家荘にて

II. 天

III. 金魚

IV. 雨

V. さくら散る

作詩：草野 心平

作曲：多田 武彦

指揮：小嶋 聰

## Stage 2

「チャイコフスキー・ロマンス」  
～チャイコフスキー歌曲集より～

何故?  
 騒がしい舞踏会で  
 語るな 友よ  
 憧れを知る人だけが  
 ドン・ファンのセレナーデ

編曲：福永陽一郎  
 指揮：成田 正人  
 ピアノ：早瀬 洋子  
 舞踏：落合 健史  
 朗読：村井 裏介

## Stage 4

「エリーの青春」  
～懐かしい日本の歌を  
素材としたコラージュ～

- |            |  |
|------------|--|
| Prelude    | エリー前奏曲                                 |
| Scene I    | 悲しくてやりきれない                             |
| Scene II   | 白いブランコ                                 |
| Scene III  | 太陽がくれた季節                               |
| Scene IV   | Hooked on "SHOWA"<br>～「昭和の歌」一挙40曲メドレー～ |
| Scene V    | 翼をください                                 |
| Scene VI   | 夢をあきらめないで                              |
| Scene VII  | 帰らざる日のために                              |
| Scene VIII | つばさ                                    |
| Finale     | 大空と大地の中で                               |

## Stage 3

## 「團伊玖磨作品集」

ひぐらし  
 岬の墓  
 舟唄～片戀～

編曲・指揮：向川原慎一  
 ピアノ：早瀬 洋子

休 憇 .....

脚本・編作曲：なりた まさと  
 指揮：成田 正人

エリー（ソプラノ）：加藤恵利子  
 エリーの母（ソプラノ）：美口 啓子  
 幼馴染みアイ（アルト）：加藤 愛  
 エリーの父：黒田 泰男  
 ホワイトジャック：永井 一美

ピアノ：早瀬 洋子  
 エリー・アンサンブル  
 ヴァイオリン：臼田 妙  
 ヴァイオリン：森下 麻奈  
 ヴィオラ：小林伊津子  
 チェロ：酒井 直  
 パーカッション：神谷 朋和

## 男声合唱組曲 「草野心平の詩から」

作詩者の草野心平は、現実を超越した宇宙的空間描写を用い、または擬人化した蛙を通して、時には直接的な言葉を用いて、人間が作り出す世の中のゆがみに対する憂うる想いを多く歌っていますが、人間に対する底のない慈愛の念が詩の至る所に見られるのも、心平の魅力の一つと言えるでしょう。また、自らのことを、暗闇のなかの“一匹のシラミ。”\*1と語り、病を患い先の見えない心境を、“生と死の入りまじつた秒読みがはじまる。”\*2と表現しています。こんなにも緊張感のある、それでいてユーモラスで温かい言葉で想いを訴えかけようとする詩風は、波瀾万丈に満ちた心平そのものではないでしょうか。

1961年、慶應義塾ワグネル・ソサイエティー男声合唱団の委嘱により多田武彦が作曲した組曲。初演時の指揮を務めた畠中良輔はそのパンフレットの中で、『～中略～もう二度とぼくの人生に、(中国での)あの兵隊の哀しい日々は繰り返さなかった筈だったのに、多田氏のこの曲はぼくに、失われた日々を感動的に喚び起こしてくれた』と語っています。5つの詩とメロディの中に込められた草野心平と多田武彦の“想い”によって記憶を甦らせたのではないでしょうか。

人を人として、人間として存在させるものは、人の心が持つ“想い”に他なりません。私達が忘れていた記憶、忘れ去りたい記憶をもう一度見つめ直し、甦らせた記憶に“想い”を吹き込んだこの5曲をお伝えしたいと思います。

\*1：詩集『未来』(1983)、「心平」より

\*2：詩集『未来』(1983)、「生と死の同棲」より

### I. 石家荘にて

遙か北の国から逃れてきたたった1人の少女。消えない傷を心に隠しながらも、遊女の街でその日を生きるために一瞬見せる微笑みが、逆に自身の心を震わせる。... そんな街全体に蠢く人々の想いの交差が、ハ短調の重い和音の響きの中、深い闇に沈んでゆきます。

### II. 天

揺るぎない、その圧倒的な存在感を誇る富士も、遙か彼方の天空から見下ろせばたった一つの臍に過ぎず、無限とも思われる洋い海もブリキの様。視線を変えると、さらにその上に拡がる大宇宙の存在。地上に生きる生物を超越した視点は、現代の我々に何を語るのでしょうか。

### III. 金魚

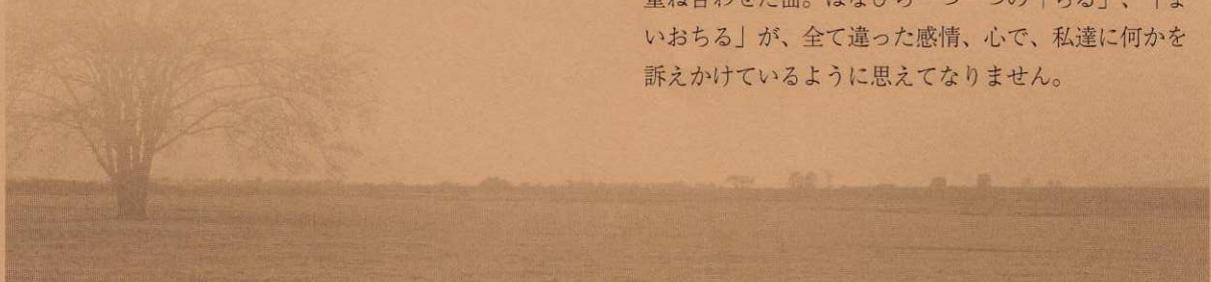
青みどろの中にたゆたい見え隠れする金魚。その姿は様々なものを連想させます。時には水平線の彼方の野火、あるいはほんぱり、と。さらには、旋律と調性的に揺れ動く様が傾城の美女を想像させ、時代の興落、歴史そのものを詩・歌一体となって描かれています。

### IV. 雨

花巻の湯治場である志戸平温泉。しどたいら天からの雨が番傘に、そして地面に落ち地上を濡らします。点となつた天からの問い合わせに対し、靄もやとなって空一面に想いを返すのです。緊張感の続く組曲の中で、唯一心安らぐ間奏曲的な作品です。

### V. さくら散る

さくらの咲く時間のあまりの短さへの儂さ、舞い落ちる愁い。「東洋の時間」という長い歴史の中で、数多の時代が生まれては夢と共に消えた、人々の想いを重ね合わせた曲。はなびら一つ一つの「ちる」、「まいおちる」が、全て違った感情、心で、私達に何かを訴えかけているように思えてなりません。



## チャイコフスキーのロマンス？

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキーは、1840年5月17日、帝政ロシアのヴォトキンスクという地方小都市に生まれました。後に、その音楽で東洋の島国の人々にさえも愛されるようになるピョートルは、小さい頃から繊細な精神の持ち主だったようです。

彼の生涯には、その女性観、女性に対する憧れを決定付けた異性が二人登場します。一人は母であるアレクサン德拉・アンドレエヴナ・ダシエ。フランス系の美しい婦人で、フランス語やドイツ語を話し、ピアノを弾き、歌をうたう才女でした。もう一人は、ピョートルが5歳の時に、聖ペテルブルクから家庭教師としてやって来た22歳のスイス女性、ファニー・デュバルク。彼女は教育者でもあり、心理学者でもあったので、既に神経症的な様相を見せ始めていたピョートルの心を、巧みに癒してくれました。

ところで、ピョートル自身、6歳になるとフランス語やドイツ語を流暢に話すようになったそうですが、何故ロシアで西欧の言語がもてはやされたのか？ 実は言語だけでなく、芸術や音楽といった文化は、すべからく西欧のものが極上で自国ロシアのものは野暮ったい、という風潮が蔓延していたのです。

一体、ピョートルが生まれ育った19世紀半ばというのは、どのような時代だったのでしょう？

産業革命で近代化をリードしたイギリスをはじめ西欧各国が、アジアの植民地化を進めます。イギリスは直轄の東インド会社を作り、ベトナムのサイゴン（現ホーチミン）はフランス領、フィリピン諸島はスペイン領に。スマトラ島やジャワ島を擁する今のインドネシアは、当時オランダ領東インドと呼ばれています。沖縄はまだ琉球王国でしたが、中国大陆の清王朝はイギリスとのアヘン戦争に敗れて香港を割譲し、上海に租界の形成を認めさせられました。ペリーが浦賀へ来航したのもこの頃です。日本が植民地化を免れたのは、東洋の奇跡ですね。

これら経済的後背地を手にした列強国の主導で、1851年にロンドンで第1回万国博覧会が開かれ、4年後にはパリで第2回と続いて行きます。交通・通信を握った国々が、政治・軍事的な支配権を持ち、経済的にも発展を見せたわけです。一方、当時の帝政ロシアは封建制度という古い体質を引き摺っており、世の流れに乗

り遅れました。西欧に憧れるのもむべなるかな…

しかし、モーツアルトの音楽に敬服していたピョートルは、同時に自国の音楽をも愛していました。西欧に技術・技法は学びましたが、生み出す作品は純粹にロシア的・スラブ的なロマンティシズムに満ち充ちていることが分かります。

さて、こうしてピョートルの時代を眺めてみると、我々の生活様式の基礎はすべて出来上がっていることが分かります。ということは、ロマンスの在り方も、我々現代人とそれほど違ってはいないはず。しかも、スマホどころか携帯電話やインターネットメールも無い時代なので私的な連絡が取り難く、却って精神的な恋愛エネルギーは濃密だったのではないかでしょうか。

幼い頃の女性観から抜け出せないピョートルは、相手に理想の美を求め過ぎるのか、実生活の上でのロマンスは普通の人のようには行かなかったようですが、その作品の中に、自ら最佳と考えるロマンスを結晶させて行ったのだと考えられます。ドイツ芸術歌曲が「リート」と呼ばれるように、ロシア芸術歌曲は正に「ロマンス」と呼ばれます。本日は、100曲になろうとする彼の「ロマンス」から、初期の頃の作品を5曲採り上げました。曲間の音楽は原曲ではなく、今回の演出上付け加えたものです。

彼が生きた時代の、青年貴族のロマンスを皆様と共に味わうために、当時文化の中心であった聖ペテルブルク発音を基にした舞台発音を用い、朗読とパントマイム風の舞踏を組み合わせてお楽しみ頂きます。尚、今回ロシア語理解のために、団員の池田祐一の尽力に加え、早稲田大学大学院の辻義昌教授に特別のご教示を仰ぎました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。4曲目の有名なゲーテの詩について、本来は女性の歌だという心配に対し、辻先生からは「メイのロシア語訳は男性言葉に変えてあるので、男が演じるのが自然」とのお墨付きも頂戴しております。

(Masato)

## 男声合唱による團伊玖磨作品集

團伊玖磨（1924-2001）は、オペラ「夕鶴」を代表作として交響曲、吹奏楽曲、声楽曲、合唱曲、映画音楽、童謡など幅広い分野で大きな業績を残した、戦後の日本を代表する作曲家です。本日演奏する3曲はもともと男声合唱用に作曲されていない作品を、男声合唱でお聴きいただくものです。グランフォニックはこれまでもしばしば、こうしたプログラムを取り上げてきましたが、原曲の良さを損なわないことはもちろん、男声合唱だからこそ表現できるやり方で、オリジナルの曲の音楽的な魅力をさらに深めたいと思っています。

さて、本日演奏する3曲のオリジナルデータは次のとおりです。

「ひぐらし」（独唱用歌曲）1947年作曲。

北山冬一郎の詩集「祝婚歌」からの5篇による歌曲集「わがうた」の第3曲。

「岬の墓」（混声合唱曲）1963年作曲。

この年の芸術祭合唱部門に参加するために小説家、堀田善衛が詩を書き、團伊玖磨が作曲した。木下保指揮のCBC合唱団が演奏して芸術祭賞・文部大臣賞を受けた。

「舟唄・片戀」（独唱用歌曲）1946年作曲。

北原白秋の詩から選ばれた5篇による「五つの断章」という歌曲集の第2曲。

★團伊玖磨は自分の歌曲を単独の作品としてよりも、歌曲集という数曲の連作にすることによって、そのテキストである詩人の世界を構成しようとしたと見られます。また、「ひぐらし」も「舟唄・片戀」も多くの声楽家にとっての重要なレパートリーとして、しばしば単独作品として歌われています。

★夏の終わりが近づいて夕闇が迫る頃、どこからともなく聞こえるひぐらしの鳴き声は、時にか細く、また時にやかましいほど響いて、移ろいゆく時の流れを惜しむかのようです。北山冬一郎の詩の主人公は悔恨にくれているのでしょうか。むなしさと哀しみが胸に迫ります。簡素に書かれたピアノの出だしと終末部、それと対照的な中間部の音の厚みによって、詩人の心情が映し出されています。

★「片戀」という詩は、北原白秋が明治末期の東京を描いた「東京景物詩」という詩集の中にはあります。團伊玖磨は、詩の中の曳舟（ひきふね=実は東京墨田区の地名）という言葉にインスピレーションを得て、ご丁寧に「舟唄」というタイトルをつけて作曲してしまいました。白秋が知ったらさぞ驚いたことでしょうが、ひょっとすると作曲者には、新古今集の曾禰好忠の和歌「由良の門を 渡る舟人 かぢをたえ ゆくへも知らぬ 恋の道かな」が念頭にあったかもしれません。こんな微笑ましい勘違いがあったとはいえ、情感細やかなメロディーと流麗なピアノパートによってアカシアの花びらの散る様と片想いの心情が見事に表現され、若き團伊玖磨の才能がほとばしる日本歌曲の傑作となりました。

★團伊玖磨本人も言っているように、「岬の墓」の堀田善衛の詩は深いものです。出てくるテーマは＜白い船＞と＜白い墓＞そして＜赤い花＞の3つであり、それらは未来と過去、変化と普遍、希望と悔恨、外と内、明と暗、自己と他人など様々な対照的な要素を暗示しているように思われます。

今、白い船は次の航海に備え、ひとときの安らいを得て入江に横たわっています。その船を見下ろす丘の上には白い墓があり、その墓は暗い影と永遠の安らいを孕んでいます。そして、ただ「岩の間に咲く」という記述しかない赤い花は一体何を表しているのでしょうか。

既にいくばくかの人生を経てきた人々は、ひとときの安らいを求める時期や全力で疾走した時期を懐かしくまたは多少とも苦々しく思い出しますが、いのちのつながりの大切さを思う時、過去へのノスタルジーに浸るばかりではなく、これから羽ばたこうとする次の世代がどうか輝かしい未来を創り出して欲しいと願わざにはいられません。船出のエールを送りつつ、万感の思いで美しい船を見つめているのは…私たち自身です。

## 最近の若い者は…

「最近の若い者はスゴイ！」…ロンドンオリンピックを観戦しながら、心底そう思いました。先人たちが何度も挑戦して跳ね返されて来た壁を、何十年ぶりかで突破してしまったり、3大会連続で金メダルを取ってしまった。たとえメダルには届かなくても、懸命にプレーする姿に熱いものを感じました。

若者がスゴイのはスポーツの世界だけ？ いえいえ、芸術の世界にも学問の世界にも、勿論一般の社会人の中にも「こりゃスゴイ」と思わせる人はいっぱいいます。

ところで、「最近の若い者はナッチャナイ」というのは、筆者が新入社員だった頃に先輩たちがよく口にする言葉でした。自分がその先輩たちの年代になると、同じ言葉を若い人たちに投げ掛けていました。やがて筆者は、その言葉がどの年代でも使われていることを知るようになります。

そして、スゴイ若者たちと同年代の人たちが、電車の中をまるで自分の部屋と勘違いしているかのように振る舞うのを見るにつけ、「嘆かわしい。最近の若い者はナッチャナイ」と感じてしまうのも事実です。

一体、「最近の若い者」は「スゴイ」のか「ナッチャナイ」のか？？？

そこで、ハタと気づきます。「最近の若い者」と一括りにするのが間違いなのだと。

一方、同じオリンピックで、70歳を超えるオジ様が選手として参加し、矍鑠たる姿を見せていました。恩師である畠中良輔先生も、90歳でお亡くなりになる寸前まで、指揮棒を振り後進の指導に当たっておられました。わがグランフォニアンも、平均年齢が60歳を超えていたとは思えないほど、皆さん生き生きとされています。こちらもスゴイ！ しかし、かと思えば、超有名大企業の元社長（アラセブン？）が破廉恥行為で捕まったというニュースも。

なんのことではない。どの世代、どの年代にもスゴイ人がいて、ナッチャナイ人がいる。この当たり前の現実が分かっていないながら、筆者は尚「若い者」を一言で括りたい衝動に駆られるのです。そして答えが見つかりました。

スゴイ人々は、皆生き生きと輝いています。若々しく光っています。なぜなら、きっといつも「青春シ

テル」からではないでしょうか？ 《青春とは心の在りようを言う》…サミエル・ウルマンの言葉通り、知的好奇心が旺盛で常に何かを求める、何かに向かって夢中になっている人は、年齢に関係なく「若い者」なのです。その意味での「若い者」は、皆「スゴイ！」のだと。

さて、今回団から頂戴したテーマは、まさに《青春》。

青春とは、元来は春を表す言葉でした。古代中国の五行思想で、春に青、夏に朱色、秋に白、冬に玄（くろ）、を当て、それぞれ青春・朱夏・白秋・玄冬と呼んだのが始まりだそうです。ついでに言えば、「青」はスカイブルーの青でなく、若葉・新緑の「あお」、つまり現代の「緑」のイメージでしょうか。

大多数のグランフォニアンが過ごした青春時代の懐かしい歌を掻き集め、それをストーリー展開に合わせて散りばめて行ったのが、この音楽物語『エリーの青春』です。ストーリー自体は、敢えて「青臭さ」を前面に押し出して、現代人が忘れかかっている大切なものを掘り出そうという試みですが如何でしょう。

いつものように、少しでも“生きるエネルギー”をお届けすることができれば幸いです。

（なりた まさと）

### 【ストーリー】

うら若き娘エリーは、大事故で瀕死状態となり、ホワイトジャック医師の元に運ばれます。両親の必死の思いが通じてか、ポジトロニックブレインに記憶を移植することで、彼女はアンドロイドとして生まれ変わります。この難手術は大成功かと思われましたが、やがてプログラムの一部が機能していないことを発見。放っておくと、ポジトロニックブレインそのものが機能不全に陥り、全プログラムが崩壊してしまうことに。それを防ぐには、キーワードと、それに関するパスワードをみつけ、再起動が掛かるようにしなくてはなりません。両親や幼馴染みのアイに支えられて、エリーは青春を取り戻すべく街に出ます。果たして答えはみつけられるのか…

## PROFILE

**堀口 文成** 総合演出  
*Horiguchi Fuminari*

舞台俳優としてデビューし、舞台活動の傍らTVドラマ等に出演。その後、演出家としてフリーになり、演劇・オペラ・ミュージカル等の演出を数多く手掛けてきた。最近はオペラ・ミュージカルの演出を中心に、ショートミュージカルを多数企画しており、コンサート形式の演出でもクラシックからポピュラーまで幅広く活動。また、西日本を中心に行政・企業のイベント演出も手掛けている。



主な演出作品：オペラ「フィガロの結婚」「コジ・ファン・トゥッテ」「ヘンゼルとグレーテル」「カルメン」「トゥーランドット」「蝶々夫人」「魔笛」「天国と地獄」他。ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」「ウエストサイド物語」他。イベント「瀬戸大橋落成記念フェスティバル（岡山）」「坂本龍馬誕生150年祭（高知）」「ロス・オリンピック前夜祭（ロサンゼルス）」他。

このように多彩な活動の中で、男声合唱の演出だけは敢えて避けてきたが、グランフォニック第10回定期演奏会にてその禁を解き、今回も連続して引き受けただけのことになった。



**向川原 慎一** 指揮  
*Mukaigawara Shin-ichi*

早稲田大学卒業。長年にわたり合唱指揮・指導を行い、現在もグランフォニックをはじめいくつかの団体の指揮者を務める。

さらに、歌曲を中心とした作曲活動を続け、2007年の奏楽堂日本歌曲コンクール作曲部門（中田喜直賞の部）では2曲が本選に進み、優秀賞と入選を得た。また合唱編曲ではカワイ楽譜から「混声合唱のための5つのトステイー歌曲」と「ドボルジャークのジプシーの歌」が出版されている。

小林研一郎氏に師事。

**成田 正人** 指揮  
*Narita Masato*



グランフォニック創設メンバー。慶應義塾大学在学中、故・木下保氏、畠中良輔氏らの薰陶を受け、指揮法を伊藤栄一氏に師事。学生時代から合唱指揮の傍ら作詞・作曲・編曲に勤しみ現在に至る。編曲モノは数知れず、第10回の『太郎の愛』のような、シナリオ起しから作曲まで自ら手掛ける音楽物語形式の作品も多数。代表作に『子犬のチロの物語』、男声合唱《愛の三部作》：『パパの子守歌』『絵描きと少年』『不破白人の恋』、盲導犬支援委嘱作『ハーネスで握手！』、常滑音楽祭委嘱作『ブチ・ハラハの謎』、華音の会委嘱作『歌うは愛する人のわざ』等々。今年9月にはソプラノ橋爪圭子氏らとブチ・コンサートを開催、ソロ活動も再開した。交声合唱団ミューザヴォーチェ指揮者。

**小嶋 聰 指揮**

Kojima Satoshi

千葉県出身。慶應義塾大学理工学部卒業。同大学院理工学研究科修了。某自動車製造会社へ勤務中。指揮を角田鋼亮氏に師事。

幼少よりピアノを始め、大学進学後、慶應義塾ワグネル・ソサイエティー男声合唱団に入団、畠中良輔、大久保昭男、北村協一、綱川立彦、佐藤正浩各先生に薰陶を受ける。大学合唱の傍ら、母校である慶應義塾中等部コーラス部を指導し、自身が中等部生のために編曲した、ミュージカル「レ・ミゼラブル」などを指揮。現在も後進の育成に努めている。グランフォニックでは、昨年より副指揮者に就任、今回グランフォニックの指揮者として初舞台となる。現在、「グランフォニック」、「藤沢男声合唱団」、「男声合唱団チーム浅草橋。」に所属。

**加藤恵利子 ソプラノ**

Katho Eriko

名古屋音楽大学声楽学科卒業。同大学卒業演奏会出演。

名古屋市新進演奏家紹介コンサート優秀賞受賞。(社)日本歌曲振興会 日本歌曲コンクール声楽部門入選。

これまでに創作オペラやオペレッタ『伯爵令嬢マリッツァ』(リーザ)『チャルダッシュの女王』(シュタージ)、ミュージカル『シンデレラ』(メイジー王妃)に出演。モーツアルト、フォーレ『レクイエム』、ドヴォルザーク『ミサ』等、宗教曲のソリストをつとめる。

また宗次ホールや市内公共施設などでの日本の歌ソロコンサートにも出演。

声楽を伊藤晶子、美口啓子の両氏に師事。(社)日本歌曲振興会会員。

Blog 加藤恵利子『うた、恋ふれば…』を公開中。

11月7~10日 名古屋市 東山荘『加藤恵利子～日本の歌、お好きですか？』、2013年2月22~24日 名古屋市文化振興事業団企画公演オペレッタ『こうもり』アデーレ役で出演予定。

**美口 啓子 ソプラノ**

Biguchi Keiko

名古屋音楽大学声楽学科卒業。在学中より伊藤晶子先生に師事。オペラ「じゅごんの子守唄」「春琴抄」また「ヘンゼルとグレーテル」「Meze Mariano」などに出演。

日本歌曲のコンサートには毎年、積極的に出演。最近は特に新作歌曲や新作オペレッタに取り組んでいる。また、合唱指揮・指導者として女声合唱団や小・中学・高校での合唱指導に数多く招かれる。常任指揮者である合唱団「We Are ONE」と女声合唱団「Saraハーモニー」では常にその演奏に好評を得ている。

昨年はナゴヤドームにおいて「1,000人の大合唱」の指揮者として大成功を収める。来年2月9・10日には守山区制50周年記念コンサートにおいて大中恩作品「おーい、あそぼ」全7曲を演奏予定。

(社)日本歌曲振興会会員、日本Gプッチーニ協会会員、スタジオあいの会会員、守山の文化を考える会運営委員

**加藤 愛 アルト**

Katho Ai

愛知県立明和高校音楽科、東京藝術大学音楽学部声楽学科アルト専攻卒業。



'99年第1回「万里の長城杯」国際音楽コンクール声楽高校の部第2位(1位なし)。第11回愛知県尾東音楽コンクール金賞、愛知県教育委員会賞受賞。'07年9月サン・マリノ共和国にて、テレサ・ベルガンサによるマスタークラス修了。オペラ「コジ・ファン・トゥッテ」「ホフマン物語」「カルメン」「ヘンゼルとグレーテル」などの出演や、第九交響曲や戴冠ミサを始めとする合唱ソロ、器楽とのジョイントコンサートやソロコンサートなど、多数演奏会で活躍中。来年2月には名古屋市文化振興事業団主催オペレッタ「こうもり」にオルロフスキー公爵役で出演予定。

**白田 妙** ヴァイオリン  
Usuda Tae

4歳よりバイオリンを始め  
る。黒川寛子・五十嵐由紀子  
両氏に師事。

第2回和歌山音楽コンクール“高校生の部弦楽器  
部門”第3位入賞。相愛大学音楽学部器楽学科卒  
業。在学中、ポーランド国立ショパンアカデミー教  
授で相愛大学客員教授でもあるクシシュトフ・ヤコ  
ヴィッヂ氏マスターズクラスの修了演奏会に出演。  
いすみホールでの同大学卒業演奏会に出演。卒業  
と同時に大阪シンフォニカー（現大阪交響楽団）  
に入団。5年間第1バイオリン奏者を務める。

現在、フリーのバイオリン奏者として名古屋・  
大阪のオーケストラを中心に客演。室内楽奏者と  
しても活躍中。名古屋フィルハーモニー交響楽団  
の団員を中心とした弦楽四重奏団「ハル・カル  
テット」のメンバー。



**森下 麻奈** ヴァイオリン  
Morisita Mana

浜松出身。信愛学園高校  
音楽科（現、浜松学芸高校  
音楽科）卒業、愛知県立芸術  
大学音楽学部器楽科、及び同大学大学院研究科修了。

'96年日本クラシックコンクール全国大会入賞。  
'99よりルヴァロア弦楽四重奏団のメンバーと  
してJTアフタヌーンコンサート、原村（現、リゾ  
ナーレ）室内楽セミナー等に参加、ランチタイム  
コンサート（宗次ホール）、ロビーコンサート（愛  
知県芸術文化センター、扶桑文化会館等）に出演。  
他にも、リラクゼーションコンサート、画家  
赤塚一三氏とのコラボレーション等行っている。  
ピアノトリオ、デュオ（ハープ、チェロ、その他の  
鍵盤楽器など）などの演奏、オーケストラの  
客演など、フリー奏者として活動する一方、ヤマ  
ハミュージックアベニュー等で後進の指導にもあ  
たっている。

今までに、高木豊美、白柳昇二、ヤーノシュ・  
マティ、服部芳子の各氏に師事。



**小林 伊津子** ヴィオラ  
Kobayashi Itsuko

6歳よりヴァイオリンを  
始める。愛知県立明和高等  
学校音楽科、愛知県立芸術  
大学器楽科卒業。卒業と同時にヴィオラ奏者とし  
て名古屋フィルハーモニー交響楽団に入団。

これまでにヴァイオリンを、故岡部新一、伊藤  
美佐子、故近藤フミ子、岡山芳子、ヴィオラを西  
岡正臣、兎東俊之の各氏に師事。

1998年リサイタルを開催、好評を博し翌1999年  
「電気文化会館コンサートホールアンコールシ  
リーズ」に出演。

ハル・カルテットメンバー。コンサートグル  
ープ花の詩会員。



**酒井 直** チェロ  
Sakai Nao

大阪音楽大学卒業。  
東京藝術大学別科修了。  
ドイツ国立リュベック  
音楽大学ディプロム取得。

チェロを川元益適、竹内良治、林俊昭、ウル  
フ・ティッシュビレクの各氏に師事。室内楽をワ  
ルター・レビン氏（ラサール弦楽四重奏団）に師  
事。

2004年は大阪で2010年は名古屋でリサイタルを  
開催。

現在、名古屋フィルハーモニー交響楽団チェロ  
奏者、名古屋音楽大学非常勤講師。  
ハルカルテットメンバー



**神谷 朋和 バーカッション**  
Kamiya Tomokazu

愛知県碧南市在住。4歳頃より打楽器を初め13歳でドラムを始める。中学高校時代はロック、ヘビーメタルに明け暮れる。

その後名古屋芸術大学音楽学部打楽器専攻卒。学生時代には現代音楽やクラシック音楽も研究しへいズや演歌、オーケストラ、ソロ等ジャンルを問わず全国的に演奏活動する。

卒業後はジャズに定め2002年に自身のリーダーバンド「ブルースウイング」を率いて自主事業を含む年間100回を超える公演を行う。地元では碧南市芸術文化ホールの依頼で第一回「Jazz in Theater Friday Night Live」を大成功に収め地域のジャズ音楽文化に大いに貢献。

2004年演奏活動を諸事情のため休止。

2010年「神谷朋和(ds)BAND」で演奏活動再開。森山威男、神田秀雄、三宅秀幸の各氏に師事。

<http://tomokazukamiya.com>



**落合 健史 舞踏**  
Ochiai Takehito

N A Cで演技の指導を受けたのをスタートとし、ダンスの世界に入る。東宝

ミュージカルダンサー出身の佐藤雅彦氏に師事したのち、ダンススタジオ SWING BEATを立ち上げる。

#### <芸歴>

1988年 名古屋市文化振興事業団主催ミュージカル「マイ・フェアレディ」に出演。活動を開始する。

新宿コマミュージカルチーム、日本ジャズダンス協会商業演劇に出演。（新宿コマ劇場、梅田コマ劇場、中日劇場、御園座ほか）

その間NYに渡り、ルイジ、S T E P Sにてジャズダンスを学ぶ。

現在名古屋を中心にショーステージ、ミュージカル、バレエ、日舞、民謡、芝居等数々の舞台に出演。振付師としても活躍中。



**早瀬 洋子 ピアノ**  
Hayase Yoko

愛知教育大学音楽科、同大学院修了。

学生時代より、名古屋二期会、名古屋オペラ協会、名古屋市文化振興事業団、愛知県文化振興事業団、三重オペラ協会、岐阜県産業文化振興事業団、名古屋芸術大学、長久手オペラレクチャーコンサートなどで多数のオペラ、オペレッタ、ミュージカルの稽古ピアニスト、コレベティトゥア、ピアノ公演ピアニストを務める。

栗原一身氏、平尾はるな氏、山崎晴代氏、三浦洋一氏、ジャンニ・クリスチャック氏らに師事。

伴奏ピアニストとして活動する傍ら、コーラス指導も手がける。また名古屋芸術大学では長年にわたり、オペラの授業助手を担当している。



## 草野心平の詩から

一、石家荘にて

茫茫々の平野くだりて。

サガレンの。

月蛾の街にはひり来れり。

潮香かぎし女。

白き夜を。

月蛾歌はず。

耳環のみふるへたり。

ああ。

十文字愛憎の底にして。

石家荘。

沈みゆくなり。

## 二、天

出晴のやうな。

五センチの富士。

海はどこまでも青ブリキ。

## 四、雨

志戸平温泉第五号の番傘に。

音をたてる。

あんまりまぶしくて却つてくらく。

満天に黒と紫との微塵がきしむ。

寒波の縞は大日輪をめがけて迫り。

シャシャシャシャ音たてて氷の雲は風に流れる。

人間も見えない。

鳥も樹木も。

出晴のやうな五センチの富士。

## 三、金魚

あをみどろのなかで。

大琉金はしづかにゆらめく。

とほい地平のシナ火事のやうに。

シナ火事が消えるやうに。

深いあをみどろのなかに沈んでゆく。

合歛木の花がおちる。水のものに。

そのお白粉刷毛に金魚は浮きあがり。

口をつける。

かすかに動く花。

金魚は沈む。

輪郭もなく。夢のやうに。

あをみどろのなかの朱いぼかし。

金と朱とのぼんぼり。

はながちる。

石家荘。

沈みゆくなり。

志戸平温泉第五号の番傘に。

音をたてる。

何千メートルの天の奥から並んでくる雨が。

地上すれすれの番傘に音をたてる。

林檎烟にはさまれた道に。

さうして落ちて沈みる。

点。

天の音信。

靄が生れひろがり空にのぼる。

## 五、さくら散る

はながちる。

はながちる。

ちるちるおちるまひおちるおちるまひおちる。

光と影がいりまじり。

雪よりも。

死よりもしづかにまひおちる。

まひおちるおちるまひおちる。

光と夢といりまじり。

ガスライト色のちらちら影が。

生れては消え。

はながちる。

はながちる。

東洋の時間のなかで。

夢をおこし。

夢をちらし。

はながちる。  
はながちる。  
はながちる。  
はながちる。  
ちるちるおちるまひおちるおちるまひおちる。

ひぐらし

北山冬一郎

岬の墓

堀田善衛

白い墓よ

その石の裂け目から  
暗い影なる休らいの  
ことばを語れ日暮れ ひぐらし  
ひぐれに 眭くひとひ空しく  
空しく暮れて夕焼 わが掌を  
かなしく染めぬ日は高く 海に  
海の辺の丘に  
上つて見下せば  
きららに光る入江の青に  
休らう 白い美しい船紺碧の空から舞い下りて  
水に休らう美しい船

日は高く 海に

丘の辺に影一つのこさず  
岩の間に咲く赤い花日は高く 影を奪い  
透明な海の風にこの岬の白い墓  
美しい船よ大いなる白鳥のよう  
休らう美しい船よ翼をひろげ船出せよ  
深く滑らかに輝く別の大洋をめざして  
波の調べにゆられつつこの丘の辺の白い墓  
影一つない真昼の丘にその墓の下にこそ  
白い墓美しい船よ 白い船よ  
船出せよ美しい船よ 白い船よ  
その彼方へと

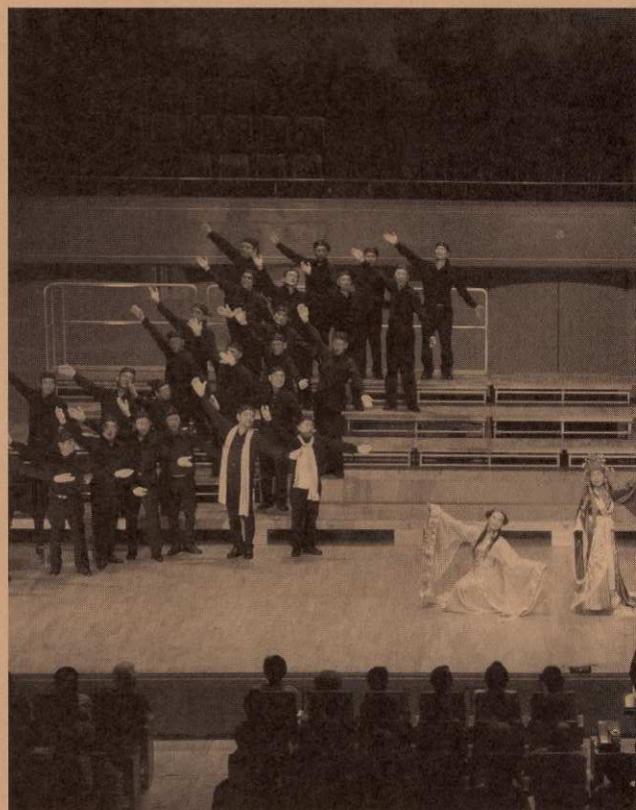
舟唄(片戀)

北原白秋

あかしやの金と赤とがちるぞえな  
かはたれの秋の光にちらぞえな  
片戀の薄着のねるのわがうれひ  
曳舟の水のほどりをゆくころを  
やはらかな君が吐息のちるぞえな  
あかしやの金と赤とがちるぞえな

## ああ…勘違い、か？

18年前、数人でスタートしたグラソニックは、激動する時代にあっても常に音楽を通して生きる喜びを伝えたいと歌い続け、今では20代から80代までの60名近い団体に成長しました。その間、私たちを応援して下さるグラマニア（勝手にそう呼んでますが）の皆様も次第に増えて、おかげさまで昨年節目の第10回定期演奏会を終え、また新たな第一歩を踏み出すことができました。これからも大切にしていきたいことはオリジナリティー。これまで、定期演奏会毎に発表してきた創作曲や独自に編曲した作品は数知れず、それは私たちの財産であり誇りであると思っています。また、演出の専門家をお招きして、歌だけではなく時として演じ踊るグラソニックワールドも作り続けてきました。平均年齢は優に60歳を超えていますが、たるんだお腹や寂しくなった髪も立派な小道具と割り切り、ステージ上の自分を見つめる婦女子各位の「うっとり」とした視線を浴びることが最高のリハビリと信じ、厳しい練習を乗り越えてきました。実はそのウルウルした視線が、「ああ、みんないい歳してがんばっているのねえ」という憐みに満ちたものであることも知らずに・・。しかし、この勘違いというか思い込みこそ我らの真骨頂。私たちがステージで楽しく輝いて（もちろん頭のことじゃないですよ）いれば、客席の皆様にもきっとそれは伝わり、生きる喜びを感じてもらえるはずだ、そんな思いで今日も思いっきり弾けます。そう、まさに全員「青春真っ只中」。振り返るにはまだ若い。愛するものがあるから、求めるものがあるから、これからも燃えるような情熱を持ち、音楽の品質向上へ地道な努力も惜しまず、歌い続けていきます。「あっ、まだ元気に歌ってるな」っていうおなじみの顔から、「あら、まだ若いわねえあの子」という新人まで、老若男女・長短肥瘦、いろいろと取り揃えておりますので、どうか引き続き御観戻のほど・・。



THE GRANPHONIC

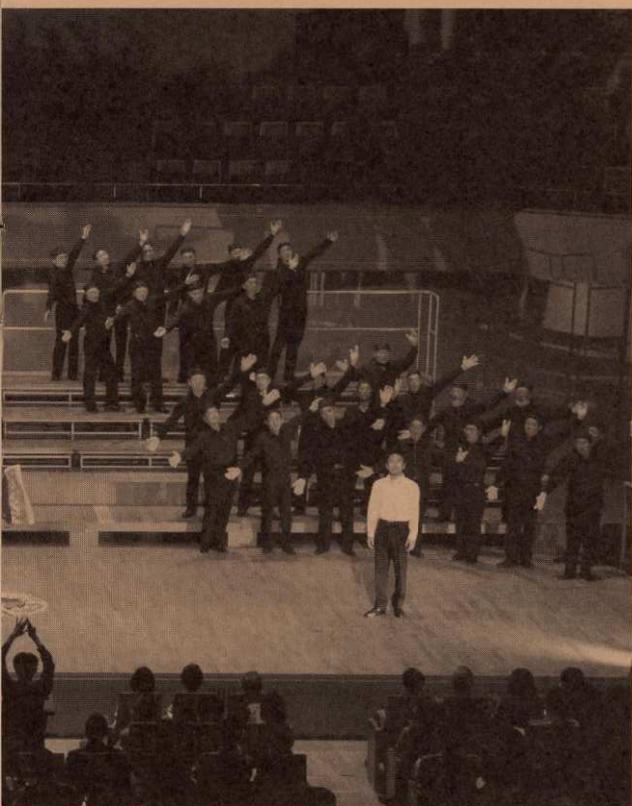
T<sup>1</sup>

|       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 佐々木正義 | 三ツ松 平 | 鹿住 誠  |
| 伊藤 高潤 | 小林 武  | 鈴木 英孝 |
| 浅井 裕之 | 黒岩 実  | 小宮 俊英 |
| 二神 晃  | 榎本 真丈 | 石川 周二 |
| 高津 真司 |       |       |

THE GRANPHONIC

T<sup>2</sup>

|       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 柴田 道昭 | 三ツ口勝弥 | 石井 清  |
| 成田 正人 | 森重 雅夫 | 間瀬 譲  |
| 新谷 岳史 | 飯田 公男 | 佐藤 正  |
| 中村 嘉夫 | 大浦 亮一 | 松浦 治徳 |
| 根木 和彦 | 池田 祐一 | 河内 幸雄 |
| 遠藤慎太郎 | 大村 元  |       |



THE GRANPHONIC

*B*<sup>1</sup>

黒田 泰男  
神田 久嗣  
寺島 正晃  
安田 俊哉  
鈴木 清次

弘瀬 嘉夫  
細江太喜雄  
早澤 信昭  
芝木 昌一  
天野 浩

永井 一美  
伊藤 慎二  
水野 邦明  
天野 浩

THE GRANPHONIC

*B*<sup>2</sup>

井ノ口貴敏  
富田 敏夫  
古田 和則  
間瀬 裕士  
鈴木 秀樹  
村上 信

浅井 良之  
外村 俊夫  
松原 成憲  
犬塚 弘道  
成井 詔彦

稻熊 裕之  
藤山 祐司  
村井 褒介  
小嶋 聰  
木村 文隆

## グランフォニック 第11回定期演奏会

## スタッフ

|              |       |
|--------------|-------|
| 総合演出         | 堀口 文成 |
| 照明           | 古川 靖  |
| (株)若尾綜合舞台    |       |
| 音響           | 吉田 友和 |
| 舞台監督         | 磯田 有香 |
| .....        |       |
| 演出助手 (Gran.) | 根木 和彦 |

|      |       |
|------|-------|
| 団長   | 細江太喜雄 |
| 幹事長  | 古田 和則 |
| 副幹事長 | 永井 一美 |
| 財務部長 | 池田 祐一 |

## パートマネージャー

|       |       |
|-------|-------|
| (T 1) | 黒岩 実  |
| (T 2) | 松浦 治徳 |
| (B 1) | 安田 俊哉 |
| (B 2) | 鈴木 秀樹 |

## 音楽スタッフ

|            |       |
|------------|-------|
| 指揮者        | 成田 正人 |
| 副指揮者       | 神田 久嗣 |
| クリエイティブ委員長 | 小嶋 聰  |
| パートリーダー    | 鹿住 誠  |

|       |       |
|-------|-------|
| (T 1) | 小宮 俊英 |
| (T 2) | 間瀬 譲  |
| (B 1) | 神田 久嗣 |
| (B 2) | 浅井 良之 |

名誉団員・指揮者 向川原 慎一

お問い合わせ：古田 tel:090-2478-9708  
THE GRANPHONIC  
<http://www.granphonic.com>

THE グランフォニック 第11回定期演奏会  
GRANPHONIC CONCERT 11th

# THE GRANPHONIC CONCERT 11th

さらに一步、新しいステージへ。

グランフォニック 第11回定期演奏会

2012  
11.3  
(土祝)

5:00pm開演(4:30pm開場)  
愛知県芸術劇場コンサートホール

指定席：2,500円　自由席：1,500円

お問い合わせ：古田 tel:090-2478-9708  
THE GRANPHONIC <http://www.granphonic.com>

Stage 1

男声合唱組曲「草野心平の詩から」

作曲：多田武彦  
指揮：小嶋聰

Stage 2

「チャイコフスキー・ロマンス」  
～チャイコフスキー歌曲集より～

編曲：福永陽一郎  
指揮：成田正人  
ピアノ：早瀬洋子  
舞踏：落合健史

Stage 3

「團伊玖磨作品集」  
ひぐらし・岬の墓・舟歌～片戀～

編曲：向川原慎一  
指揮：向川原慎一  
ピアノ：早瀬洋子

Stage 4

「エリーの青春」  
～懐かしい日本の歌を素材としたコラージュ～

脚本・編作曲：なりた まさと  
指揮：成田正人  
エリー（ソプラノ）：加藤恵利子  
エリーの母（ソプラノ）：美口啓子  
幼馴染みアイ（アルト）：加藤 愛  
エリー・アンサンブル／ヴァイオリン：白田 妙  
ヴァイオリン：森下麻奈  
ヴィオラ：小林伊津子  
チェロ：酒井 直  
パーカッション：神谷朋和  
ピアノ：早瀬洋子

総合演出：堀口文成  
照明：古川 靖  
音響：吉田友和  
舞台監督：磯田有香